

‘ὁ κόσμος, ἄλλοίωσις. ὁ βίος, ὑπόληψις.’

57号 1992.11.28

文・編集・発行

恋 怪子

LIVE: THE STREET BEATS

1992.11.15
11.16
新宿ロフト

★LIVE ON THE WILD SIDE '92-'93★
12-27(SUN)新宿NISSIN POWER STATION



9月27日横浜7TH AVENUE, 9月29日市川CLUB GIO, 10月5日新宿ロフトと3回つづけてTHE STREET BEATSのライブが楽しくなかったから、11月15日に新宿ロフトで開演を待っているあいだも期待感がわかず、4人がステージに出てきてまだじがわきたたなかった。それが一曲目の「BEATNIK ROCKER」がはじまったとたん、いいなあ、うれしいなあって感じた。歌も演奏もとてもびやかでしなやか。ギター、ベース、ドラムがヴォーカルをしっかりと支えて、φK1に力を与えている。間章(あいだ あきら)は、「私はルーリードを詩人としてな決して評価しない、もちろんボブ・ディランもパティ・スミスでもある。十九世紀には4人のランボーがいた。百人のボナールがいた。一万人のバルレヌがいた。しかし二十世紀には、その百人は千人は一万人は詩人になどならないし、ロッカーや暴走族になるだろう。ルーリードは詩人になどならなかったことで類いまれな主体を持った存在なのだ。彼の演奏と歌から詩だけをぬき出したらそれはぬけがらにすぎない。」と「ヴェルヴェット・アンダーグラウンド試論」(「僕はランチにでかける」p44ヌ)に書いている。

このことはTHE STREET BEATSのφK1にもいえることだ。φK1は19世紀だったら詩人になったであろうような歌い手である。今回のロフトのライブで「毒の河を泳いで」、「BARRIER CRASH」、「BLACK MARKET GANG」、「THIS IS TOKYO JAP」といった歌をきいていて、詩の力ということについて第一に考えさせられた。これらは全部「STANDING STANDING」のアルバムに入っている歌で、ライブでききはじめて頃はあまり好きになれなくて「STANDING STANDING」のCDも買わなかったくらいなのだ。8月1日にキッパできいたときはいいなって思えたし、今回きいたときはとても好きで、歌詞のひとつひとつに自分の考えがのっかっていった。それが詩の力といえるものではないだろうか。と考えさせられたのである。もちろん詩としても間章も書いているように演奏と歌から切り離れたぬけがらとしての詩ではなく、THE STREET BEATSの演奏と歌の中にある詩であるということはいままでのない。

15日にφK1は6,7年前につくったという歌をやったのだが、歌い終わった後でそのことを話すのをきくまで新しい曲だと思ってきいていた。それくらい現在のφK1の歌になっていた。「少年の日」や「BOYS BE A HERO」もそうである。新しい歌の「風の街の天使」をきいていたときも、そういう詩の常性について考えさせられていた。「風の街の天使」ができるには、なにかその素材となるような出来事があったと思う。φK1はその出来事を他人に話すような歌詞にはせず、その出来事を深く見つめ、自分の心を探り、ことばを紡いで詩にする。φK1には詩のじが宿っているから(だから19世紀だったら詩人になっていただろうといえるのだけど)、それができる。そして、その歌を歌うたびにφK1の中ではその出来事そのものと詩とがどろどろ溶けていくのではないだろうか。「風の街の天使」を5月のライブではじめてきいたときよりも今回ロフトできいたときの方が、その出来事のもつ生臭さみたいなものが感じられなかったから、歌うたびにそれだけ詩として深まっていったのだ。素材となった出来事を知らされることは、きく方にとっては何の足にもならない。よくステージで「この歌はこういことがあったときに作ったもので、おななどという人がいるが、そういうことをきいても、のぞき見趣味やぜんてく好きのきき手がかくすぐられるだけ。ライオンがライブで「猿」という歌を歌ったら、それをきいた人に「あの川にはもう猿はいない」といわれ、「おれの中ではとんどん大まくなっているんですよ」といっているきき手をきいて、歌う方だけでなく、きく方にも詩のじが宿っていないと、歌をとおして両方が交流しあうことはできないのだと思った。

1・10(SUN) 新潟WOODY (BEAT PARTY)
1・13(WED) 名古屋E.L.L.
1・14(THU) 大阪ミューズホール
1・15(FRI) 神戸キキョウ
1・16(SAT) 京都ミューズホール
1・18(MON) 広島WOODY STREET
1・19(TUE) 広島WOODY STREET
1・21(THU) 福岡Beat
1・30(SAT) 市川CLUB GIO
1・31(SUN) 横浜7thアベニュー

お問い合わせ/各ライブハウス・ホール

風の街の天使 '92-12-16 ON SALE!!

VCL-12315 ¥1500 TAX INCLUDED. 新宿ロフトは18歳以上、市川CLUB GIOは17歳以上



φK1の歌に、いまは痛みはない。しなやかさと、やさしさと、力強さかととてもいい。THE STREET BEATSをきくようになって4年半くらいになるが、ききはじめて頃、あれほど鋭く尖っていてあれほど痛みをむき出しにして歌っていたφK1が、いまでは、しなやかで澄みきったやさしさと、きく者を抱擁する。こうなるまでにφK1はきつといくつものトンネルをくぐってきたのにちがいない。THE STREET BEATSのファーストアルバム「NAKED HEART」をきいたときに「舌はや血は流れない。髪が逆立つことはない。人間を見据える視線に露がかかってくる。そして日常性生のなかで等身大に生きていくことを手に入れる。これが17歳から生きのびたということである」と書いた。たしかにφK1は17歳で生きのびた。もはや血は流していないかもしれない、髪が逆立つこともないかもしれない。しかし、人間を見据える視線に露はかかっていない。哀しみさえ感じるほど澄みきっている。17歳で生きのびただけで人生が全てOKになるわけではなく、また生きのびなければならぬものがやってくる。φK1はつぎつぎとやってくる生きのびなければならぬものに立ちむかい、そこから生きのびていく。いくつものトンネルをくぐるといえるのは、そういう意味なのである。

トンネルからぬけ出したとき、それ以前とくらべるとあまりにもかみ続けたところにいることを考えると、トンネルの中にとじこめられているときは止まっているのではなく、実は全力で疾走しているのかもしれない。

詩人萩原朔太郎は「今、私はさらに一の新しき変化をするため、古き殻を脱がうとしてもがいてゐる。私はまた変るであらう。けれども「力」が、尚ほ充分に感じられる朝まで、しばらく地下に冬眠する蛭蛹とならう。私は尚弱い。日光は空に暗く、生えない翅が殻の中でかじかんでゐる」と書いている。日光は空に暗くても、目に見えない光が地下の蛭蛹にさんさんと射しているのにちがいない。生えない翅はかじかんでいてもそこでは激しい細胞分裂がおきている。だからこそ、蛭蛹が美しい蝶になる。

人間は、いくつものトンネルをくぐりぬけ、挫けずに生きのびなければならぬものに立ちむかい、生きのびるたびに蛭蛹が蝶になるように、美しく、きれいに、澄みやかにになっていく。

ロフトでφK1を見ていて、どうしてこれほど感動し、うれしいと感じるのかかわかった。そして、どうしてTHE STREET BEATSだけでなく、他のいくつものバンドを追いかけてつづけているのかかわかった。

それは、正直に、誠実に、気高く生きている人を、生きている姿で見る事ができるからなのだ。人間は正直に、誠実に、気高く生きることができるといえることが、ステージの上で実証されているからなのだ。気高く生きている人や気高く生きた人が書いた書物もあるし、気高く生きた人のことを書いた書物もある。絵画もある。映画もある。CDもビデオもある。それらうちの何れに出会えばやはり感動する。けれども、共に生きていて、同じ場所、同じ時間を共有しながらそれに触れること以上に私を感動させ、うれしいと感じさせるものはない。

15日の1曲目の「BEATNIK ROCKER」から16日の最後に行った「星降る夜に」までが1回のライブという感じだった。だからとそれることなくずうとそういう感動の中にいられた。16日最後から2曲目に「GOOD FELLOWS」という新しい、ストレートでシンプルでパワフルなロックンロールをやったあと、φK1が「ラストは『星降る夜に』というのをきいたときには感動とうれしさの頂点で、「やった、やった」と声をあげ、年をたにきながらとびあがってよろこんだ。「星降る夜に」は、もちろん最高だった。